

29. フィリピン海外研修で学んだフィラリア症・日本住血吸虫症の現状

医学部学生

林 裕子, 近藤忠一, 大津留由吏江, 柿下優衣, 近藤辰磨, 竹内真理, 茂木麻実

国際環境衛生室

大平修二

熱帯病寄生虫病室

千種雄一, 林 尚子

【目的】フィリピン海外研修を通して, 本邦においては根絶されたフィラリア症や日本住血吸虫症の実地調査を行い, これらの疾患について, より理解を深めることを目的とした。

【方法】Oriental Mindoro 州 Villaflor 村でのフィラリア症患者に対する集団衛生処置指導に参加し, 研修した。また, 日本住血吸虫の中間宿主貝 (*Oncomelania hupensis quadrasi*) の棲息地である Oriental Mindoro 州 Malabo 町, Victoria 町 と Leyte 州 Dagami 町で民家の敷地内や用水路で中間宿主貝を採取し, その感染率を調べた。さらに Dagami 町では敷地内で感染貝生息が確認されている一家族についての診療を実地研修した。

【結果】フィラリア症患者の陰嚢水腫や象皮病病変を実際に視診・触診したところ, その重症度により大きさや硬さが異なり, 重症と思われる病変ほど病変が硬化している事を体得した。一方, 日本住血吸虫に関して, 中間宿主貝を Malabo 町, Victoria 町, Dagami 町でそれぞれ 75, 939, 700 個採取した。Dagami 町で採取した貝では検査した 44 個中 1 個が感染貝であった。敷地内で感染貝生息が確認された家の父母は, 血液抗体検査でも陽性を示し, 特に父親は, 肝臓超音波検査で日本住血吸虫症に特有の Network pattern 画像を示した。さらに, 政府の対策として集団駆虫 (mass treatment) を行っていたところを研修した。住民には, 駆虫薬とともに副作用を抑える効果と参加への incentive として無償で軽食が提供されていた。

【考察】日本においては, 教科書上でしか知識が得られなかった, フィラリア症と日本住血吸虫症に関して研修できたことは, 医師を目指すものとして, 貴重な体験であった。日本住血吸虫症の調査では感染貝が生活圏に実際存在すること, 患者の超音波画像を確認できたこと, フィラリア症については処置の方法などを住民に周知させることにより一定の効果が期待できることなどがわかった。日本住血吸虫に対するマストリートメントやフィラリア症患者に対する処置は一定の成果を収めているものの, これらの感染症対策には, さらなる衛生環境の整備や住民に対する啓蒙活動を進めて行くことが必要であると考えた。

30. カンボジアにおけるメコン住血吸虫症の現状と問題点

熱帯病寄生虫病室

桐木雅史, 林 尚子, 千種雄一, 松田 肇

メコン住血吸虫症はラオス, カンボジアにおいて公衆衛生ならびに社会経済的に重要な問題となっている。カンボジアでは集団駆虫を中心とする対策の結果, 1995 年に糞便検査で 40% 以上あった虫卵陽性率が 2006 年には虫卵が検出されなくなるまでに至っている (Kato-Katz 法による: カンボジア保健省調査)。しかし演者らがカンボジア保健省と実施してきた血清疫学調査では一部の村落で高い抗体陽性率が維持されており, さらに 2008~2010 年に演者らが実施した糞便検査 (フォルマリン-デタージェント法: FD 法) では多数の虫卵陽性者を認めた。以上の結果から, 地域によっては現在でも住民が感染の危険に曝されていると考えられる。

感染が継続する要因として, 集団駆虫の方法・回数の問題, 標準検査法 (Kato-Katz 法) の感度の問題, 住民行動 (川との接触), 中間宿主貝・保虫宿主の存在などが挙げられる。

より効果的な本症対策を構築する上で, 住民の行動, 保虫宿主および中間宿主の生態の解析により感染実態を解明し, リスクマップを作成することは重要であると考えられる。

リスクマップの作成に向けて以下の調査を 2011 年 4~5 月に実施した。

【方法】カンボジア・クラチェ県の抗体陽性率の異なる 3 村落について, スケッチマップ作成, 川岸の景観の記録, 中間宿主貝の採集調査を実施した。

【結果・考察】3 村落のうち, 抗体陽性率の高い村落で多くの中間宿主貝が確認された。また, わずかながら中等度の村落でも中間宿主貝が確認されたことから, 中間宿主貝の分布が感染リスクの要因のひとつである可能性が示唆された。3 村落のうち, 抗体陽性率の低い村落の河岸には石や流木が少なかった。中間宿主貝は石や流木などに付着して生息するため, 河岸の景観はリスクの指標になる可能性が示唆された。

【まとめ】今後の調査で中間宿主貝の生態や住民行動を解析してリスクマップを作成し包括的な本症対策の構築につなげていきたい。